

自己開示からみた留学生と 日本人学生の友人関係

横 田 雅 弘

はじめに

文部省の21世紀留学生10万人計画(90年末現在約4万人)にそって、近年留学生は激増している。しかしながら、岩男・萩原(1988)は10年(1975-1985)に渡る縦断的研究の結果、留学生の日本人・日本社会に対するイメージはほとんど好転しておらず、特に最初の1年間で、「親しみやすい-親しみにくい」、「つめたい-あたたかい」、「つきあいやすい-つきあいにくい」など〈親和性〉に関する項目を筆頭に、日本人に対する評価は大きく悪化することを見出し、日本人との人間関係に大きな問題があると結論している。それでも、確かにここ数年間、留学生を支援しようとする日本社会の動きはかなり活発化してきており、85年以前の状況とは異なった新しい段階を迎えている。けれども、異文化接触経験の少ない一般の日本人にとっては、どのような支援が効果的かといったノウハウは乏しく、日本人の援助も、その仕方によってはかえって留学生の中に否定的反応を引き起こす(横田, 1988)など、異文化接触の新たな展開に伴う問題は、今後更に増加すると考えられる。実際、日本に限らず、外国人との接触が増加することが必ずしも関係改善をもたらすとは限らない。接触の仕方によってはかえって偏見や差別を助長するということは、多くの研究の一致するところである(Allport, 1945; Amir, 1969)。Allport(1954)は、異民族の接触がプラスの結果をもたらすための条件として、対等なステータス、受け入れ国側の制度的な支援、共通の目的をもった協同・協調関係をあ

げている。この意味では、留学生及びその家族は、日本人にとって最も受け入れやすいグループであり、彼らとの接触を通して異文化との共存の意味や方法を学ぶ価値は絶大である。

星野(1979)は、既に10年以上も前に「今後異文化間心理学の最も重要な研究課題は、調和的な対人関係やグループ関係を作り出す条件に関するものである」と述べているが、実践に結びつく研究成果は未だに不十分である。特に留学生に関する研究は、現在世界の全留学生の約3分の1にあたる30万人をかかえるアメリカ合衆国において、現地への適応に関する研究が蓄積されてきたものの、日本ではまだほとんどない状態である。しかし、英国におけるアフリカ、ヨーロッパ、中近東、及びマレーシアの留学生を調査した Furnham & Trezise (1983) は、彼らが英国人の学生に比べて社会生活に満足しておらず、精神的にも不安定になりがちであることを見出しており、しかもどのように支援すべきかといったことについては、ソーシャル・サポート仮説 (Gottlieb, 1981) からのアプローチもほとんどない (Furnham & Alibhai, 1985) と述べている¹⁾。

留学生の友人関係パターンについては、Bochner, McLeod & Lin (1977) が機能的モデルを提唱し、Furnham & Alibhai (1985) がより綿密な調査によりそれを確認している。そのモデルによれば、留学生は次のような3つの社会的ネットワークに所属しているとみることができる。第1の最も主要なネットワークは、同じ国から留学している者との間に形成され (mono-cultural)、ここでは民族的・文化的価値が共有される。第2は、受け入れ国の者との間に形成され (bi-cultural)、その主な機能は、勉強、研究、その他留学に必要な諸手続きをスムーズに遂行することである。第3のネットワークは、母国以外の諸国からの留学生との間に形成されるもので (multi-cultural)、特定文化に限定されず、勉強や仕事とも離れたリクレーションの場を提供する。このように、留学生は相手の出身地によって機能的に異なったネットワークを形成するが²⁾、しかし交友関係を量的にみると、いずれの研究も、留学生のネットワークがかなりの程度同国あるいは同じ文化圏 (第1ネットワーク) に偏っており、受け

入れ国の学生との友人関係(第2ネットワーク)はあまりみられないという結果を示している(Bochner, 1982; Bochner & Orr, 1979; Bochner, Hutnik & Furnham, 1985).

Bochner (1982) は、留学生の適応にとって、受け入れ国の人々からのソーシャル・サポートが最も重要であるとしながらも、受け入れ国の学生との関係が深まりにくい状態では、出身を同じくする(同文化圏)留学生とのネットワークは死活的な意味をもつものであり、これを否定するのではなく、むしろ支援しながら、なおかつよりオープンなネットワークに育てることが望ましいと述べている。まさにその通りであろう。これらの研究は、留学生の適応や受け入れ国に対するイメージに大きな関係をもつ留学生と受け入れ国の人々との人間関係の促進が(Sellitz & Cook, 1962)、日本に限らず世界的な課題であることを示しているが、しかしながらなぜ促進されないのかについてはほとんど答えを用意していない。そこで本研究は、現状の留学生と日本人学生の関係を、自己開示(self-disclosure)のパターンとレベルを通して把握すると同時に、そこから両者がなぜ親しくなりにくいのかということの示唆を得ようとするものである。

自己開示を正確に定義することは難しいが、一般的に言えば、「特定の相手に対して、自分自身の個人的な情報を言葉で伝えること」(Cozby, 1973)であり、誰もが日常の人間関係において経験していることである。榎本(1983)は、対人関係を規定する要因としての自己開示研究を概観し、主な研究方向として、〈1〉自己開示と状況との関係、〈2〉自己開示の対人認知におよぼす影響、〈3〉親密化過程における自己開示の研究を分類した。

親密化過程の研究において、Altman & Taylor (1973) は、自己開示を開示者の一方的なものとしてではなく、相互関係の中で捉えることの重要性を指摘したが、しかしそれは自己開示を関係の深まりに伴う結果とみなすものであった。Derlega & Chaikin (1975) は、自己開示し合うことによって親しくなるという関係促進的側面を想定していたが、更に、Derlega & Grzelak (1979) は、自己開示の機能として、相手の行動を操作したり関係進展のペースや方向

をコントロールすることをあげている。この自己開示の人間関係における戦略的機能をより明確に打ち出したのは Miell & Duck (1986) である。彼らは、自己開示を友人関係形成の最も中心的なストラテジーとして捉えるが、それは開示者と被開示者の関係性のなかで意味づけられるものであり、どのような話題もそれ自体が親密度を決定しているわけではなく、コンテキストのなかで捉えなければならないと考える。従って、自己開示の深まりは必ずしも友人関係の結果を示すというわけではなく、むしろ手段として用いられるのであり、開示者が二者関係のダイナミクスの中で、その開示の量や親密度をコントロールしながら、両者の関係をしかるべき方向に導いていこうとすると述べている。しかし、Miell & Duck (1986) も認めているように、自己開示を結果か手段かと二者択一的に考えることには無理がある。自己開示は、関係のコンテキスト（親密度、状況、被開示者要因、あるいは開示者のパーソナリティなど）によって、ある時にはより結果的であり、ある時にはより戦略的（手段）であると考えられるが、たとえその開示が親密になった結果現れてきたものとしても、それは同時に関係の維持機能をはたしており、単なる親密化の産物ではない。自己開示がどのような条件でより結果的、あるいは戦略的となるか、あるいはそのように認知されるかについての研究は、自己開示動機と親密性、あるいは関係の進展段階との関係（小口、1989）や自己開示動機とパーソナリティとの関係などから更なる知見が期待される。本研究では、関係形成がある程度できあがっている友人関係について調べており、自己開示の結果的側面が現れると考えられるが、それは同時に戦略的側面の考察にも利用できるものとする。

自己開示と異文化間の要因を扱ったものは少なく、豊前ら（1990）の他にはほとんど見あたらないが、どのような状況で、どのような内容を、どの程度開示することが適切であるとみなされるかについては、当然開示者の母国文化の規範が影響を与えている（Derlega & Stepien, 1977; LeVine & Franco, 1981; Schumaker & Barraclough, 1989）。しかし、留学生を扱う場合には、彼らの出身国が様々であるために、個々の背景を考慮することはむずかしい。留学生

をひとまとめにして捉えることは必ずしも適切ではないが、留学生という立場そのものが彼らに共通の特性を与えやすいことも確かである。また、留学生と日本人学生という単純な分類は、大学組織の中にも、学生の意識の中にも存在しており、留学生を特殊な集団として扱うという考え方が日本の大学では一般的でもある。それでも本調査では、9割以上がアジアからの留学生であるという日本の現状と、西洋人かアジア人かで日本人の対応が違うというしばしば指摘されてきた知見をふまえ、対象者をアジアからの留学生に限った。

調査方法

予備調査として、インタビューと自由記述式の質問紙を用いて社会科学系国立大学の30名の大学生(男性19名、女性11名/留学生はアジア7名、西洋2名、日本人学生21名)に、「日本において、あなたが最も親しい学生(親友)と話す話題にはどのようなものがありますか。できるだけたくさんあげてください」と尋ねた。更に、自己開示質問紙 ESDQ 45 (榎本, 1984), 久世・蔭山 (1973), Jourard (1971) を参考にして、12領域24自己開示項目(留学生・日本人学生とも共通)の質問紙を作成し、本調査に用いた。

12領域は、1「将来」(将来の進路の迷い、自信・不安)、2「目標」(生き方、現在の目標)、3「勉強」(学問的興味、勉強の仕方)、4「大学」(授業に対する要望、大学生活のはりあい)、5「趣味」(音楽・スポーツ、ショッピング)、6「意見」(政治、最近の事件)、7「人間関係(一般)」(人間関係のもつれ、友人の好き嫌い)、8「異性関係」(悩み、恋愛経験)、9「心傷」(心傷、恥)、10「身体」(身体健康、容姿)、11「家庭」(親への不満、家庭内のめもごと)、12「性」(体験・関心、性器)である。

これらの12領域は、その内容から、第1～第6領域を志向的領域、第7～第12領域を関係的領域と命名した。回答形式は、「0: 全く話さない」から「4: 十分に話し、すべて打ち明ける」までの5件法尺度で、回答者は、JS (Japanese student, Same sex): 最も親しい日本人の同性の友人、JO (Japanese student, Opposit sex): 最も親しい日本人の異性の友人、FS (Foreign student,

Same sex): 最も親しい留学生の同性の友人, FO (Foreign student, Opposit sex): 最も親しい留学生の異性の友人の4つのカテゴリーに対し, 実際にJS~FOに相当する友人がいる場合に限って, 24項目のそれぞれに関してどの程度話しているか, または話すだろうと思うかを番号で回答するものである。なお, 留学生版については2名の留学生(オーストラリア)にバイリンガル・チェックしてもらった英語訳を併記した。

回答者は, 東京の3大学(国立2校, 私立1校)の日本人学部過程大学生238名(男性115名/女性123名)と全国10の大学(国立5校, 公立1校, 私立4校)のアジア系留学生128名(男性75名/女性53名)である。調査は1989年4月~6月に行われた。折半法による信頼性係数は0.95(FS: .94, JS: .95)であった。

結 果

全24項目に対する回答の平均は2.08で, ほぼ一般的なことだけ話すという水準(5件法尺度で2.0)である。これを留学生(F)でみると1.88, 日本人学生(J)では2.19となっており, 1%水準で有意な差がみられる。しかし, この結果は日本人学生がその性格特性, あるいは国民性として留学生よりも自己開示する傾向をもっていることを示すものではない。開示者には, 4つのカテゴリーそれぞれに日本において最も親しい実際の人物を想定して回答するよう教示されているが, その親しさはあくまで比較的なものであり, 特に「日本において」という限定によって, 多くの留学生にとっては, 数年間の勉強に忙しい時期に形成された友人関係に限られている。また, 「最も親しい」という設定は, 一人であっても特別に親しい友人がいれば, その友人が想定されて回答されるので, 開示レベルが高いからといって, 必ずしもその人物が誰に対してもよく開示しているとは限らない。すなわち, 日本人学生は, 一般的に言えば豊前ら(1990)の述べるとおりの留学生よりもむしろ自己閉鎖的にみえるが, 親密な友人を少なくとも一人は持っている者が多く³⁾, その関係の中ではかなり深い開示がなされている。逆に留学生では, 日頃アドバイザーとして接してい

る筆者の印象からみても、日本人学生よりもはっきりと意見を述べようとする傾向があるが、日本での学生間友人関係では、充分に開示できるような関係ができていないと感じているのであろう。これについての検討は考察の章で述べる。

(1) 領域別自己開示度 (Fig. 1)

はじめに、日本人学生が全員学部生であるのに対し、留学生には大学院生も含まれるので、自己開示における年齢の影響を領域別自己開示得点と年齢の相関をとって調べたところ、趣味の領域にのみ有意な相関がみられた ($p < .01$)。しかし、全体としては豊前ら (1990) と同様、自己開示と年齢との相関は小さいので、これについては無視できると考えた。

領域別に自己開示度をみてもみると、「将来」2.55 (F: 2.32, J: 2.67), 「目標」2.51 (F: 2.38, J: 2.58), 「勉強」2.48 (F: 2.42, J: 2.51), 「大学」2.50 (F: 2.28, J: 2.61), 「趣味」2.53 (F: 2.18, J: 2.72), 「意見」2.16 (F: 2.10, J: 2.19) の全ての志向的領域 (全体: 2.46, F: 2.30, J: 2.55) で、留学生、日本人学生共に、一般的話題の水準 (2.0) を越えて開示している。関係の領域 (全体: 1.69, F: 1.46, J: 1.83) では、日本人学生が「人間関係」2.07 (F: 1.90, J: 2.16), 「異性関係」2.00 (F: 1.56, J: 2.23), 「心傷」1.88 (F: 1.55, J: 2.06) でこの水準を越えて開示しているが、留学生ではこの水準を越えるものはない。留学生と日本人学生を比べると、どちらの領域でも1%の有意水準で日本人学生の開示が留学生のそれを上回るが、特に関係の領域においてその差が大きい。

日本人学生において最も開示されているのは「趣味」の領域、ついで「将来」, 「目標」となるが、留学生では「勉強」が最も開示されており、ついで「目標」, 「将来」となっている。志向的領域で留学生と日本人学生の開示レベルに有意水準1%の差が見られるのは、「将来」, 「大学」, 「趣味」であり、逆に差のない領域は、「勉強」と「意見」である。留学生では6つの志向的領域にそれほど差がみられないのに対し、日本人学生では、「意見」の領域が他の全ての志向的領域に対して有意水準1%で低くなっていることが特徴的であ

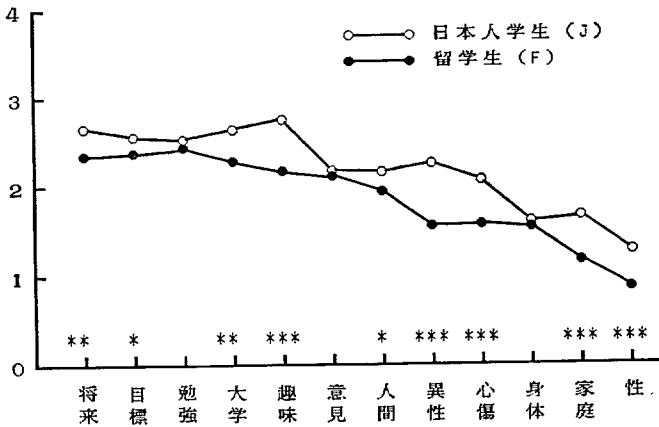


Fig. 1 領域別自己開示度 (*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$)

る。

最も開示されていないのは、共に「性」1.11 (F: 0.82, J: 1.26) の領域で、特に留学生ではほとんど話さない水準 (1.0) をも下回っている。「家庭」1.49 (F: 1.17, J: 1.67) と「身体」1.56 (F: 1.52, J: 1.59) もあまり開示されていないが、これらは榎本 (1987) の結果と一致する。「身体」では留学生と日本人学生に差がみられないのに対し、「家庭」では留学生が1%水準で有意に下回っているが、留学生が物理的に家庭から遠く遠れていることなどから理解できよう。

(2) 同性の相手 (FS, JS) に対する開示 (Fig. 2)

①日本人学生 (J) の開示:

留学生に対する開示 (J-FS)

日本人学生に対する開示 (J-JS)

J-FS では、志向的領域は一般的内容の開示レベル (2.00) であり、関係的領域はほとんど話されていない (1.10) というはっきりした二分化が見られる。これに対して、J-JS では、志向的領域 (2.90) だけでなく、関係的領域でも、「人間関係」(2.63), 「異性関係」(2.95), 「心傷」(2.52) はかなり深く話され

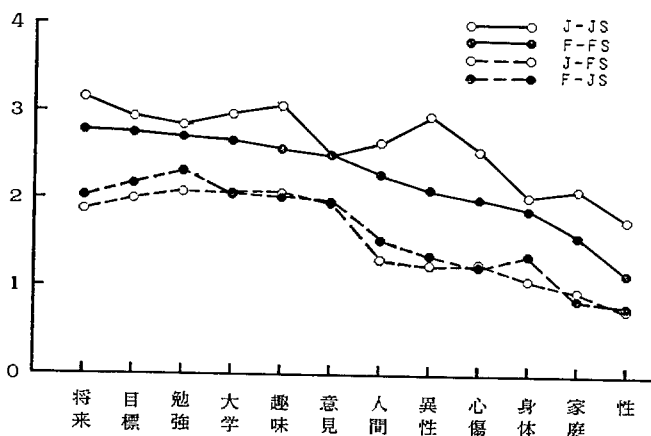


Fig. 2 同性に対する開示度

ており、特に「異性関係」は最も深く話される話題の一つとなっている。J-JSでは、最も開示レベルの低い「性」の領域(1.75)でさえもある程度は話されている。

②留学生(F)の開示:

日本人学生に対する開示(F-JS)

留学生に対する開示(F-FS)

F-JSは、志向的領域(2.10)において一般的内容の開示が見られ、関係的領域(1.21)はほとんど話されないというパターンを示し、①のJ-FSとの対応がみられる。F-FSは、開示の中心はやはり志向的領域(2.67)であるが、関係的領域(1.89)でも、「人間関係」(2.29)についてはある程度話され、「異性関係」(2.10)、「心傷」(2.00)、「身体」(1.88)についても一般的なこととしては話題にされている。F-FSを上記①におけるJ-JSと比べると、平均値で有意に下回るだけでなく、「趣味」および「異性関係」でJ-JSのような特に深い開示がみられないこと、「勉強」や「意見」の領域では有意な差がないことが特徴的である。

(3) 異性の相手(FO, JO)に対する開示(Fig. 3)

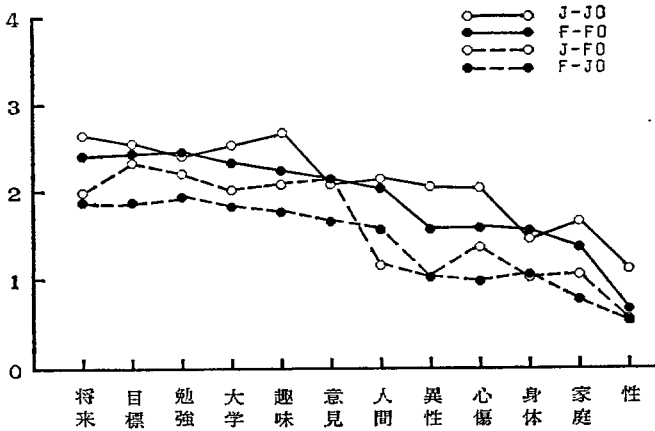


Fig. 3 異性に対する開示度

③日本人学生 (J) の開示:

留学生に対する開示 (J-F O)

日本人学生に対する開示 (J-J O)

J-F O でも、上記の J-FS, F-JS と同様に、志向的領域 (2.12) で一般的なことが話され、関係的領域 (1.02) はほとんど話されないという二分化がみられる。志向的領域では、日本人同士の場合は、同性への開示が明らかに異性への開示を上回っているのに比べ、留学生に対しては、有意ではないが異性への開示が同性への開示を上回る (F-F O > J-FS) という傾向がみられる。J-F O と J-J O を比べてみると、志向的領域の「目標」、「勉強」、「意見」では開示レベルに有意な差は見られない。

④留学生 (F) の開示:

日本人学生に対する開示 (F-J O)

留学生に対する開示 (F-F O)

F-J O は全領域の平均では最も低い開示レベルを示している (1.46)。一般的な内容の水準を越えている領域は一つもないが、志向的領域についてはほぼこの水準に近い (1.86)。F-J O と F-F O は開示のパターンが非常によく似ている

が、開示レベルは「性」の領域を除く全ての領域でF-F Oが1%水準で有意に高い。F-F Oでは、全ての志向的領域(2.32)と「人間関係」(2.04)において一般的な内容の水準を上回るが、深く開示されているといえる領域はない。日本人同士の異性間の開示であるJ-J Oと比較すると、「趣味」、「異性」、「心傷」、「性」の領域が開示されていないことがわかる。

全体を比較してみると、留学生同士、あるいは日本人学生同士では、相手が同性である場合の方が、異性である場合よりもより深く開示されているが、留学生・日本人学生間の開示条件ではほとんど差がみられない。すなわち、相手が同性か異性かという条件よりも、留学生か日本人学生かという条件の方がより基本的に作用していることを意味するが、これは開示の条件が階層をなし、上位の条件が満足されなければ下位の条件は意味を持たないような構造が存在することを示唆する。

(4) 開示者の性差

開示者の性差の有意水準を Table 1 に示した。男性の平均値が女性の平均値を上回るケースが、「意見」と「性」の領域で幾つか見られるほかは、概ね女性の開示が男性を上回っている。しかし、性差が顕著に現れていると言えるのは、日本人学生同士の開示だけであり、留学生同士、あるいは留学生と日本人学生の間では、統計的に有意になるものは少ない。

日本人学生同士の開示を領域別にみると、関係的領域において特に大きな性差が現れている。榎本(1987)の同性及び異性に対する開示と比較すると、榎本の血縁的自己に相当する「家庭」の領域と、精神的自己の情緒的側面に相当する「心傷」の領域で差がみられたことは一致した。しかし、本調査では比較的大きな差の見られた「人間関係」と「異性関係」の領域(榎本の社会的自己の私的側面に相当)と「身体」の領域(同、身体的自己の機能的側面に相当)では差が見出されていないこと、ならびに本調査では有意な差が見出されなかった「性」の領域(同、身体的自己の性的側面に相当)で有意差が見出されていることは異なった結果となった。

Table 1
自己開示の性差の有意水準

	開示関係	J	F	J-JS	J-JO	J-FS	J-FO	F-JS	F-JO	F-FS	F-FO
領域	将来				*						*
	目標		**			(-)				**	
	勉強				*						
	大学		**	*	*	(-)					
	趣味	**		***					**		
	意見	(-)	(-)	(-)		*(-)		(-)	(-)	(-)	
	人間	**		***	*						
	異性	*		**							
	心傷	**		**	*		*				
	身体	***	*	***	**						**
	家庭	***	*	***	***		**				*
	性				(-)			(-)	(-)	(-)	

注: (-)は男性の開示が女性を上回ったことを示す。

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

考 察

今回の調査で扱った全ての領域において、留学生は留学生に、日本人学生は日本人学生により深く開示しているという基本構造がみられた。個人は、その友人を社会的な比較の対象としながら自らの社会化をすすめるが(Weiss & Lowenthal, 1975)、比較の対象としてふさわしいのは同じような状況におかれた他者であり、そのような他者の気持ちを知りたいという願望(Schacter, 1959)が開示を促進し、それが友人関係を形成していくというプロセスがある。特に留学生の場合には、異文化の地で外国語を使用するなど幾つかのハンディキャップを共有することが、互いの共感性を高めてより一層このプロセスを促進すると考えられる。

しかし一方では、彼らが異文化における新たな社会化の過程で適応のモデルとするのは、その文化で適応している日本人の行動様式でもあり、そこから学ぶものが留学のひとつの成果にもなるはずである。けれども、残念ながら本調査の結果からも推察されるとおり、実際には留学生と日本人学生はあまり親しくなっていないし、留学生の対日イメージも来日後直線的に悪化している(岩

男, 萩原, 1988). 日本人学生は, どうやら留学生にとっての社会化のモデルにはあまりなっていないようである.

領域別にみると, 留学生も日本人学生も関係的領域は志向的領域に比べて開示されにくい. 確かに, Miell & Duck (1986) が指摘するように, 開示される話題の親密度 (Topic Intimacy) は, その話題をどのように開示するかによって浅いものにも深いものにもなりうるが, しかしある話題はそもそも話題として選ばれることが少ないということも疑いえない. 特に留学生と日本人学生の間にかわされる会話には, それが同性間でも異性間でも, 関係的領域の話題はほとんど話されていない. 話題そのものが志向的領域に限られているのである.

日本人同士の同性条件においては, 関係的領域である「人間関係」, 「異性関係」, 「心傷」が深く開示されており, 特に「異性関係」は全領域中最も開示されている領域の一つである. 本研究では, 親密でない関係における開示との比較は行っていないが, 開示されにくい関係的領域において深い開示がみられるということは, これらの3領域での開示レベルが, 同性の日本人学生間の関係の深まりを最もよく示すのではないかと予想される.

これを友人形成における自己開示の戦略的側面から検討するとどうであろうか. Miell & Duck (1986) は, 最もしばしば用いられる自己開示の戦略的手法の一つは, 初めに一般的なレベルで, あるいは冗談めかして, または仮定的な言い回しである話題を持ち出し, 相手の反応を試しながらその話題をよりパーソナルなものにしていったり, あるいは逆にその話題から離れていくというものであると述べている. 彼らは, そのような場合に持ち出されやすい話題領域の傾向については特に言及しておらず, むしろどのような話題もその扱い方次第で浅くも深くもなるという立場をとっているが, 文化的背景, 生活環境, 年齢などの条件によって, このような関係初期の段階でいわば一つの試金石として持ち出される話題に何等から傾向があることは充分考えられる. 日本人学生同士の同性条件で特徴的に現れる深い異性関係の開示は, それが同性の日本人学生間で友人関係形成の進退の判断に, 意識的にせよ無意識的にせよ, 最も

持ち出されやすい話題の一つであることを示唆するのではなからうか。

横田(1991)は、因子分析による留学生と日本人学生の親密化を阻む要因の研究のなかで、日本人学生が友人形成初期の接触機会に際して、まず緊張を低減しようとする傾向があることを見出しているが、日本人学生が高い開示レベルを示す趣味や異性関係の話題は、彼らにとっては緊張の低減をはかりやすい領域なのであろう。本研究に関する予備調査のインタビューでも、ある日本人男子学生は、「留学生とは興味のある異性の話など打ち解けた話題になかなかならない」と述べている。

また、同研究は、留学生が日本人学生と親しくなりにくい原因として感じている要因の一つに、「日本人学生の会話には個人的な意見や主張が希薄である」という点があることを見出したが、本研究の「意見」の領域は、日本人学生の開示が留学生を上回らない例外的な領域であり、日本人学生にとっては、高い開示レベルを示す他の志向的領域と比べて有意に開示レベルの低い領域である。この領域は、志向的領域のなかでも個人的な価値観を表明しやすい領域であるが、「気持ちを察しにくい留学生に対して議論することへの不安」が親密になりにくい要因のひとつである(横田, 1991)とする日本人学生にとっては、緊張の低減にむしろマイナスの効果をもたらしかねない話題領域と感じられているのかも知れない。逆に留学生が、友人関係形成の基本を個人的な意見交換によって知り合うことと考えているとすれば、この領域は、比較的躊躇なく持ち出されるであろう。

Berg & Clark (1986) は、将来親密な関係になっていくかどうかということは、関係の非常に初期の段階で決定されるのであり、Altman & Taylor (1973)の主張するように徐々に分化していくのではないと述べている。なぜそのように早い時期に分化していくのかについてはまだ十分に答えられていないが、親密な関係とそうでない関係とは全く別なルール、あるいはスクリプト(Abe-Ison, 1976)に従って展開されるので、むしろ徐々に親密な関係を築いていくということは難しいという。そのような初期の判断(これは必ずしも意識的なものではなからう)のプロセスは、言語的なコミュニケーション以前の漠然と

した第一印象から、言語的なものも含む相互作用に及ぶ。しかし、言語的な自己開示という点からすると、本研究からは一つのモデルとして次のような見方が示唆されるのではないだろうか。すなわち、同性の日本人学生間では、友人関係形成のかなり早い時点で、人間関係、異性関係、心傷体験など関係的領域の話題が持ち出されやすい。そのような話題は、一度話し出されてしまえばむしろタマエでなくホンネの話になりやすく、話し方次第で緊張を低減しやすいものと考えられている。そして、それに対する反応がその後の関係をどう進めるかを定める一つの鍵として感覚的に判断されやすい。これに対して留学生は、留学と関係の深い志向的領域が話題の中心となり、その中で個人的な意見交換を行おうとするので、関係的領域における日本人学生の開示に対しては相互性を示さないために、両者はなかなか親密化のスクリプトに入ることができないのである⁴⁾。

さて、最後に本調査の結果と豊前ら(1990)の結果を比較してみなければならない。それは、豊前らの調査では、第一に留学生の方が日本人学生よりも明らかに自己開示しており、第二に日本人学生と留学生で自己開示に適した話題が異なるとは思えないという、本調査とは一見全く異なる結果になっているからである⁵⁾。その考察として、豊前らは、日本人学生がむしろ自己閉鎖的国民性をもつのではないかと示唆し、また留学生という立場は、見知らぬ人々の中で暮らしていかなければならないために、努力して自己開示的に振舞おうとする傾向を持ちやすいこと、あるいは留学を志す若者は、特に自己評価が高く対人関係に積極的な人々かも知れないといった可能性をあげている。このような調査結果とその考察について、筆者も概ね妥当なものと考え、この調査で自己開示の動機についても調べられたことはまことに適切であった。

それではなぜ両調査結果に大きな相違が現れたかと言えば、それは調査の設定に決定的な相違点があったからである。つまり、豊前ら(1990)が本調査の学会発表抄録をもって両者を対比させ、正反対の結果であるとしたことは、抄録故に記述が不十分であったとはいえ、無理な対比であった。彼らの調査では、留学生が開示する対象人物は父親、母親、同性の友人、異性の友人、外国人の

友人であり、本稿の「結果」の冒頭で述べたように、必ずしも日本にいる日本人学生や留学生に限定されていないし、また必ずしもある具体的な人物が想定されたわけではないので、例えば同性の友人については、母国にいる親しい友人一般を想定したのかも知れない。このような設定では、上記の第一点、第二点について、彼らの調査に現れた結果は納得できるものであり、むしろこのような設定の違いを考慮して両研究結果の隔たりの大きさを考えてみると、留学先での深い人間関係形成がいかに難しいものであるかという Bochner らの先行研究を裏付けているように思われる。

おわりに

本研究の結果は、まだまだ仮説の域を越えるものではない。今後、これを実際に検証していくためには、友人関係形成の方略に関する実験研究が必要である。しかし、留学生と日本人学生の相互理解教育の現場に携わる者としては、実際に何かを行いながら、それそのものを実験として試行錯誤していかねばならない。ここで考えなければならないことは、江淵(1990)により示唆された分離主義と統合主義の問題である。一般的に言って、日本では留学生に対して特別の扱いをする分離主義に基づいた施策がとられており、それなりの理由も認められる。しかし、この考え方には日本人の側の変化という最も大事な視点が欠けやすいという落とし穴がある。本研究がテーマとしたような問題は、どちらか一方の問題ではなく、両者のダイナミクスの中で初めて考えられるものであり、しかもいわゆる留学生への対応と称される問題のほとんどは、基本的にはそのような構造を持つものなのである(横田, 1990)。今後、留学生と日本人学生の関係が、結果的により深まっていくような施策を考えるならば、基本的には分離主義ではなく、統合主義に基づく視点をより柔軟に取り入れていかねばならないのではないだろうか。

- 1) 異文化におけるソーシャル・サポート・システムの役割については, Fontaine, G. 1986 Roles of Social Support Systems in Overseas Relocation: Implications for Intercultural Training. *International Journal of Intercultural Relations*. vol.

- 10, 361—378. にレビューされている。
- 2) 筆者の日本における研究（審査中）では、第二（bi-cultural）の機能は確認されたが、第三の multi-cultural な関係は弱く、第一の mono-cultural な関係が大変強いという結果を得た。
 - 3) 本調査で、被調査者である日本人学生が友人として想定した日本人学生（同性）との関係をみると、非常に仲がよいと答えた者が77%であるのに対し、留学生同士（同性）ではこれが37%しかみられない。
 - 4) なお、ここでは日本人学生が関係の領域で試験的な開示を行うことを前提としているが、そもそもこれらの領域では、留学生に対して開示することを不適切と判断してそのような開示を差し控える場合も同様である。
 - 5) 豊前ら（1990）には、本調査が彼らの調査と同様に JSDQ を用いたことになっているが、これは誤りである。

引用文献

- Abelson, R. A. 1976 Script processing in attitude formation and decision making. In J. Carrol & J. Payne (Eds.), *Cognition and social behavior*. Hillsdale, NJ: Erlbaum, pp. 33—46.
- Allport, G. W. 1954 *The nature of prejudice*. Cambridge, MA: Addison-Wesley.
- Altman, I. & Taylor, D. A. 1973 *Social penetration*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Amir, Y. 1969 Contact hypothesis in ethnic relations. *Psychological Bulletin*, 71, 319—342.
- Berg, J. H. & Clark, M. S. 1986 Differences in social exchange between intimate and other relationships: Gradually evolving or quickly apparent? In V. J. Derlega & B. A. Winstead (Eds.) *Friendship and social interaction*. New York: Springer-Verlag, pp. 101—128.
- Bochner, S. 1982 The social psychology of cross-cultural relations. In S. Bochner (Ed.) *Cultures in Contact: Studies in Cross-Cultural Interaction*. Oxford: Pergamon, pp. 5—44.
- Bochner, S. & Orr, F. E. 1979 Race and academic status as determinants of friendship formation: A field study. *International Journal of Psychology*, 14, 37—46.
- Bochner, S., Hutnik, N. & Furnham, A. 1985 The friendship patterns of overseas and host students in an Oxford student residence. *Journal of Social Psychology*, 125 (6), 689—694.

- Cozby, P. C. 1973 Self-disclosure: A Literature review. *Psychological Bulletin*, 79, 73—91.
- Derlega, V. J. & Chaikin, A. L. 1975 *Sharing Intimacy: What we reveal to others and why*. New Jersey: Prentice-Hall (福屋武人・榎本博明訳 1983 ふれあいの心理学 有斐閣)
- Derlega, V. J. & Grzelak, J. 1979 Appropriateness of self-disclosure. In G. J. Chelune (Ed.) *Self-disclosure*. San Francisco: Jossey Bass, pp. 151—176.
- 江淵一公 1990 日本における留学生受入れの理念と体制の分析視点 神戸大学主催「国際化時代の留学生受入れに関する国際シンポジウム」配布資料(未公開) pp. 105—108.
- 榎本博明 1983 対人関係を規定する要因としての自己開示研究 *心理学評論*, 26(2), 148—164.
- 榎本博明 1984 青年期における自己開示性(3) 日本心理学会第48回大会発表論文集, 563.
- 榎本博明 1987 青年期(大学生)における自己開示性とその性差について *心理学研究* 58 (2), 91—97.
- Furnham, A. & Alibhai, N. 1985 a The friendship networks of foreign students: A replication and extension of the functional model. *International Journal of Psychology*, 20, 709—722.
- Furnham, A. & Trezise, L. 1983 The mental health of foreign students. *Social Science and Medicine*, 17, 365—370.
- Gottlieb, B. 1981 *Social networks and social support*. Beverly Hills CA: Sage.
- 岩男寿美子・萩原滋 1988 日本で学ぶ留学生 勁草書房
- Jourard, S. M. 1971 b *Self-disclosure: An experimental analysis of the transparent self*. New York: John Wiley & Sons.
- 久世敏雄・蔭山英順 1973 「困った場面」における自己開放性についての一研究 依田新編 わが国における青年心理学の発展 金子書房 pp. 151—170.
- Miell, D. & Duck, S. 1986 Strategies in developing friendships. In V. J. Derlega & B. A. Winstead (Eds.) *Friendship and social interaction*. New York: Springer-Verlag, pp. 129—143.
- Schacter, S. 1959 *The psychology of affiliation*. Calif.: Stanford University Press.
- Sellitz, C. & Cook, S. 1962. Factors influencing attitudes of foreign students toward the host country. *Journal of Social Issues*, 18, 7—23.

- 豊前貴子, 大淵憲一, 中村雅知 1990 自己開示に関する研究—日本人大学生と留学生の比較— 東北大学学生相談所紀要, 第17号, 43—59.
- Weiss, L. & Lowenthal, M. F. 1975 Life-course perspectives on friendship. In M. F. Lowenthal, M. Thurnher & D. Chiriboga (Eds.) *Four stages of life*. San Francisco: Jossey Bass.
- 横田雅弘 1988 日本人からの援助に対する留学生の否定的反応の分析 一橋論叢, 100 (5), 45—63.
- 横田雅弘 1990 激増する留学生と国際交流アドバイザーの必要性 学生相談研究, 11 (2), 77—84.
- 横田雅弘 1991 留学生と日本人学生の親密化に関する研究 異文化間教育学会編 異文化間教育, 5, アカデミア出版会 (印刷中)

(一橋大学専任講師)